

ライプニッツの論理学的人間存在論

—新しい教育関係論へ向けて—

中 井 裕 之

The Logical Human Ontology of Leibniz:
Toward New Educational Relationships

NAKAI Hiroyuki

はじめに

I. 言説の正当性と人間存在へのアプローチ

II. 論理学的アプローチ

III. 内属説

IV. 個体的実体

V. 実体相互間一致の基礎措定（予定調和の基礎措定）

VI. ライプニッツにおける人間の実在性

結び

[註]

[参考・引用文献一覧]

はじめに

近年、教育学において他者論が盛んに議論されている。それは、「教育という現象を自己と自己、自己と他者の関係、つまり人間と人間、人間と社会、人間と文化といった関係概念に求めなければならない」^①という意識の現れである。他者論に注目が集まるのは、ひとつには、教育を自己－他者関係の問題と捉え、そこから新たな教育学を構想しようとするからである。

本稿ではライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）の人間存在論を取り上げ、それが本質的に自他の関係論となっていることを見たい。ここでは、1686年の時期を中心として議論を展開する。それはライプニッツが『概念と真理の解析についての一般的研究（*Generales Inquisitiones de Analysis Notionum et Veritatum*）』—以下『一般的研究』と略記—と『形而上学叙説（*Discours de métaphysique*）』を書いた時期であり、またライプニッツとアントワヌ・アルノー（Antoine Arnaud, 1612-1694）が「個体概念」ないし「個体的実体」について書簡を交わした時期

である。すなわちそれは、ライプニッツにおける論理学的立場の時期である。ライプニッツは多様なアプローチで人間存在を把握してゆくが、1686年の段階において、彼は論理学的アプローチから人間を捉える。本稿では、論理学的アプローチによるライプニッツの人間存在論を見る。そこにおいては人間存在がまず確定的にあり、そこから両者の関係性が考えられるのではない。むしろ逆に、関係性が人間存在を規定する。ライプニッツによれば関係性の中でこそ人間の存在は実体化される。1686年のライプニッツにおいては、それが論理学的に説明される。

ライプニッツの人間存在論が本質的に自他関係論であるとするならば、それはまさしく教育の根本理論を提出している。ここではライプニッツを手掛かりに、人間存在と教育関係のかかわりを考察する。ライプニッツの論理学的人間存在論に、新しい教育関係論の可能性を探ってみたいと思う。

I. 言説の正当性と人間存在へのアプローチ

ある言説が外ならぬ哲学的言説として成り立つためには、何らかの仕方でその言説の正当性が保証されなければならない。そうでなければ、哲学的言説は哲学的言説として我々に一定の知を与えるものとはならないであろう。哲学的言説が哲学的言説として意味を持つのは、ひとえにその言説の正当性が保証されている場合である。ある言説が正当性の保証を欠く場合、その言説は単なる絵空事に過ぎないものとなり、そこで展開される議論も知の名に値しないものとなる。それは文学としての、あるいはフィクションとしての面白さはあるかもしれない。しかし、しばしば繰り返し語られるように、哲学が「ピロソ피아 (φιλοσοφία)」, つまり「愛知」として知を愛することである限り、そうした正当性を欠く言説は少なくとも哲学的言説とは呼べないことになる。

さて、我々が一定の知を手に入れたと言えるのは、その知（命題）が何らかの仕方で正当化される場合である。したがって哲学的言説は、自らの言説の正当性を保証しなければならない。そこには正当化の手続きが必要となる。そうしてこそ我々は世界ないし人間について何ものかを語り得る。そこで初めて我々は一定の知を手にすることができる。様々な哲学者・思想家は様々な、自らの哲学的言説の正当性を保証する手続きを自らの哲学説の中に織り込む。

例えば、デカルト (René Descartes, 1596-1650) の場合、「方法的懐疑 (doute méthodique)」により、疑っても決して疑うことの出来ない「コギト (cogito)」を見出し、そして欺かない誠実なる神を証明した上で、世界や人間についての議論を展開する。その際、真理の基準となるのが「明晰判明 (clara et distincta)」性である。明晰判明性こそが、デカルト哲学に言説の正当性を与えてゆく。

ところが一方、ライプニッツは、デカルトのこの明晰判明性に異議を唱え、批判を加える。ライプニッツにとって、デカルトの明晰判明性はあくまでも主観的なものであり、真理の基準とはなり得ない。ライプニッツは明晰で判明であることそのものが、概念の分析により証明されなければならないとするのである^④。そこでライプニッツは「実体概念 (notion de la substance)」の論理的分析に向かう。ここに、世界および人間を語る際にライプニッツに論理学的アプローチを取らせた理由がある。少なくとも1686年の時期、ライプニッツにとって人間存在は、論理学的アプ

ローチにより正当性を与えられつつ語られるのである。

Ⅱ. 論理学的アプローチ

ライプニッツの哲学は多様な立脚点を持つ。実際、ライプニッツ研究者、ミッシェル・セール (Michel Serres, 1930-) も、彼の著書『ライプニッツのシステム』の中で、次のような感想を述べている。「ライプニッツの哲学が叙述し構築している世界へ身を投じる者は消え去ることのない困難に見舞われる。すなわちそうした人はライプニッツの哲学に体系的組織があることはすぐさま分かり、それを確信し続けるのであるが、その組織を把握しその体系を理解する段になると困難を感じるのである。彼はある潜在的構成を常に垣間見つつも絶えずそれが理解できないという混乱した感情を抱く。ある一貫性を何度も俯瞰的には感知しつつもその実測図からは遠ざけられているというどっちつかずの理解を抱く。アリアドネの糸を手にも地図の与えられない迷宮の中を進んでいるという感覚を抱く」^⑧と。

増永洋三や永井博も指摘するように^⑨、ライプニッツの哲学は、ある時は形而上学的原理、ある時は力学的原理、ある時は論理学的原理、またある時は数学的原理を中心としてまとめられているように見え、どの原理を立脚点にして彼の哲学体系全体を理解すればよいかが難しい。そのため、こうしたライプニッツの思想を整然と理解し、それらを体系的に捉えるために、様々な努力がなされている。例えば、ディールマン (Eduard Dillmann) は力学からライプニッツの哲学を根拠づけようとしたのであるし、また、カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874-1945) は認識論の立場からライプニッツの哲学を読み解き、ゲーランド (Albert Görland, 1869-1952) は神学を、ハイムゼート (Heinz Heimsoeth, 1886-1975) は形而上学を中心的なものとして据えた。また、ラッセル (Bertrand Russell, 1872-1970) やクーチュラー (Louis Couturat, 1868-1914) は論理学的原理を立脚点とし、ブランシュビク (Léon Brunschvicg, 1869-1944) は数学的原理を立脚点とした^⑩。これらは、同一のライプニッツの体系を様々な視点から眺めたものである。それらは異なる様相を呈するが、一つの体系の切り口のの違いに過ぎない。したがって、どの観点から見ようとも、その指し示す全体は同じ一つの体系を表している。

実は、ライプニッツの哲学体系そのものもそういう作られ方をしており、一見するとまとまりなく拡散しているかに思える個々の言説も、それぞれの観点からまとめられた同一体系の様相の違いに過ぎない。したがって、我々はどの立場から出発しようとも、一貫したライプニッツの思想体系の全体を見渡すことが出来る。ライプニッツの表現を借りるならば、それはあたかも「同一の都市が、それを眺める者の異なる位置に応じて、さまざまに表現されるようなものである」^⑪。この文章は個と宇宙との関係、つまり個がそれぞれの仕方で宇宙を表現することを譬えて表したものである。これはそのままライプニッツの哲学体系そのもののあり方をも示している。蓋し、我々は一定のパースペクティヴの下でしか世界を見ることは出来ないのである。

ライプニッツは、「私はまさに実体概念を真の哲学の鍵のひとつと考える」^⑫と言い、この実体概念の分析から人間存在の実体を「モノアド (Monade)」として取り出すのであるが、論理学的立場においてこの実体概念は「個体概念 (notion individuelle)」の考え方と結び付き、「個体的実体 (substance individuelle)」として論じられる。実際、ライプニッツの論理学に関する最重要著作

『一般的研究』が書かれた年である1686年に、『形而上学序説』が完成しており、そこでは「個体的実体」が主題的に論じられている。またこの同じ時期にアルノーとの往復書簡で、「個体概念」ないし「個体的実体」を巡る活発な議論が闘わされている。なお、この時期以後、実体は「力 (vis)」との関係で論じられていく。それは例えば、『第一哲学の改善と実体概念について (*De primae philosophiae Emendatione, et de Notione Substantiae*)』(1694年)、『実体の本性と実体相互の交通ならびに心身の結合についての新説 (*Système nouveau de la nature et de la communication des substances, aussi bien que de l'union qu'il y a entre l'ame et le corps*)』(1695年)を見れば分かる。

Ⅲ. 内 属 説

さて、ライプニッツにおける論理学の根本命題は内属説である。内属説は真理論であり、その内容は、真なる肯定命題において述語概念は主語概念に内在するというものである。この内属説(つまりは真理論)の内容を詳しく見るために、まずライプニッツ自身の言葉を引いてみたい。次の文章はライプニッツがアルノーに宛てて出した1686年7月14日付書簡⁸⁾の一部である。ライプニッツはここでアルノーが個体的実体に関して提出した疑問に答えるため内属説をもってそれを説明している。この書簡は内属説および内属説と個体的実体の関係を考える上で重要な意味を持つ。そこでライプニッツは次のように言っている。「肯定的で真なるいかなる命題においても、それが必然的なものであれ偶然的なものであれ、普遍的なものであれ個別的なものであれ、いつも何らかの仕方で述語の概念は主語の概念の内に含まれる。つまり、述語ハ主語ニ内在スル。そうでなければ真理とはいかなるものか私には分からない」⁹⁾と。ここでライプニッツの言う「命題 (proposition)」とは、主語概念と述語概念の結合を意味する。ライプニッツが命題ということを考える場合、彼は「AはBである」という形をした定言命題を想定している。ライプニッツは言う。「私が望むように、もしすべての命題を項とし、仮言命題を定言命題として理解し、一括してすべての命題を取り扱うことが出来るならば、それは私の記号法と概念分析に驚くべき簡易性をもたらし、そして最も重要な発見となるだろう」¹⁰⁾と。そして実際、ライプニッツはすべての命題をこの「AはBである」という形の定言命題に還元しようとした。これに関してライプニッツは1679年の論文「計算の原理 (*Elementa Calculi*)」の中で次のように言っている。「ここで、私は特に断らない場合、命題を定言命題と考える。しかも、定言命題はそれ以外の命題の基礎であり、様相命題、仮言命題、選言命題、その他すべての命題は定言命題を基礎に置く。さらに私は、AはBである、あるいはAはBでないを定言命題と呼ぶ。後者は、AはBであるのが偽ということである」¹¹⁾と。この文章はライプニッツが命題を問題にする際、「AはBである」という形の定言命題を基礎にして考えているということを示している。

したがってライプニッツにとって真理、あるいは真なる命題とは、「AはBである」という形の命題において、主語概念に述語概念が内属する(含まれる)ことを意味する。それはある意味で分析的な(analytisch)命題ということになる。というのも、述語の概念は主語の概念の中に既に内包されており、主語の概念の分析により述語の概念は得られるからである。ライプニッツは言う。「一つの命題の項 (terme) と項を結び付ける何らかの基礎が常に存在しなければならないが、それはそれら項の概念の中になければならない」¹²⁾と。真なる命題において、主語概念に述

語概念が内包されているということは、この命題が自同命題に帰着することを意味する。ここから我々はライブニッツにおける真理の二種類の区別を明らかにすることが出来る。

ライブニッツは真理を二種類に分類する。それは「必然的真理 (verité nécessaire)」と「偶然的真理 (verité contingente)」である。必然的真理は「永遠の真理 (verité éternelle)」とも呼ばれ、偶然的真理は「事実の真理 (verité de fait)」とも呼ばれる。さて、必然的真理であるが、それは自同命題であるか、あるいは主語概念を分析することで自同命題に帰着するもののことを言う。これは今見た真なる命題の意味に完全に一致する。偶然的真理とは、系列が無限に複雑に絡み合っているために主語概念の分析で自同命題に帰着することが出来ないもののことを言う。しかしだからといって、述語概念が主語概念に含まれない訳ではない。ただ我々の力では、分析により自同命題に帰着させることが出来ないだけである。先程、ライブニッツにおける真なる命題が分析的な命題と述べたが、その場合、酒井潔も指摘するように⁽¹³⁾、「分析的」という言葉は広い意味で用いられなければならない。

したがってライブニッツにとって真なる命題とは、必然的真理のみならず偶然的真理をも含むものである。先に引用したライブニッツのアルノー宛書簡で、「必然的なものであれ偶然的なものであれ、・・・いつも何らかの仕方です語の概念は主語の概念の内に含まれる」とあるのはそのことを意味している。必然的真理においても偶然的真理においてもどちらも述語の概念は主語の概念の内にその根拠を持つが、ただ偶然的真理の場合はその系列が無限に広がっているため、述語概念を主語概念から導くためには宇宙全体を問題にしなければならない。更に我々が宇宙全体の根拠を問うとき、それは神の意志を問題にすることになる。必然的真理の場合、明らかにその反対のものを想定することが不可能であるが、偶然的真理の場合、その反対のものを想定することも可能である。なぜなら、必然的真理の場合、その反対は直ちに矛盾を引き起こすが、偶然的真理の場合、その反対も矛盾を引き起こさず、我々はそれを考えることが出来るからである。例えば、我々はシーザーがルビコン河を渡らなかった世界を考えることが出来る。しかしその世界はこの世界とは異なる世界である。シーザーがルビコン河を渡った根拠は世界のあらゆる事柄の無限に複雑な関係の中でしか明らかにされない。それは宇宙の全体を問題にすることであり、それを問うことは神の意志を問うことである⁽¹⁴⁾。

以上、我々はライブニッツの内属説を見てきたが、この内属説からライブニッツの実体概念は導き出される。というのも、ライブニッツにおいて実体とは必然的真理のみならず偶然的真理をも含む無限の述語を担う究極的な主語、個体的実体であるからである。

IV. 個体的実体

実体概念は、ライブニッツがそれを「真の哲学の鍵」と言っているように、彼の哲学の中心的位置を占める。実際、我々がライブニッツの哲学ということで、通常まず思い浮かべるのは、彼の実体概念の「モノド」であろう。このモノドは1686年の頃、すなわち『形而上学叙説』が書かれた当時は「個体的実体」と呼ばれていた。

ライブニッツは個体的実体を内属説を用いて論理学的に規定する。内属説は個体的実体を論理学的に表現するという機能を担っている。内属説とは、真なる命題において述語概念が主語概念

に内属するというものであった。その際、「多くの述語が、一つの同じ主語に属し (s'attribuent), この主語がもはや他のいかなる主語にも属さない時、この主語が個体的実体と呼ばれる」⁽⁴⁵⁾。この実体の定義はアリストテレス (Aristoteles, 384-322BC) に由来し、ライプニッツはそれを踏襲している。事象の根拠は常に主語概念の内にあり、その究極的主語が実体である。この実体の定義を論理的に説明するのが内属説である。ライプニッツは言う。「実体とは常に究極的主語である (ultimum subjectum semper est substantia)」⁽⁴⁶⁾と。ライプニッツにとって実体とはこの「究極的主語」、すなわち「個体的実体」を意味する。

ライプニッツは『形而上学叙説』第8章で個体的実体を次のように説明する。「個体的実体の本性、つまり完全な存在 (estre complet) の本性とは、ある完成された概念 (notion accomplie) を持つということなのであるが、その概念は、完全に完成されているため、その概念が属する主語が持つすべての述語を十分に理解し、そしてそれらの述語をそこから演繹させることが十分に出来るのである」⁽⁴⁷⁾と。「個体的実体」はそれに関するあらゆる述語を含む「完成された概念」を有する。それに対し「偶有性 (accident)」は「その概念がその属している主語に属し得るすべてのものを含んでいるわけではない存在」⁽⁴⁸⁾である。ライプニッツは具体例を挙げてこのことを次のように説明する。「例えば、アレクサンダー大王に属する王という性質は主語を考慮に入れないければ、一人の個人にまで十分に限定されないし、またアレクサンダーの他の諸性質をまったく含まず、アレクサンダーの概念が含んでいるもののすべてを含んでいる訳でもない。これに対して、神がアレクサンダーの個体概念、つまりコノモノ性 (hecceité) を見る場合、そこに同時に彼について真に述べることの出来るあらゆる述語、例えばダリウストポルスを打ち破るだろうといったようなことの根拠と理由を見るのである。更にはそこに彼が自然死で死ぬか毒殺で死ぬかといった歴史によってしか知り得ないようなことを、ア・プリオリに（そして経験によらずに）知ることまで出来るのである。したがって、諸事物のつながりをよく考察するならば、アレクサンダーの魂の内には常に彼にこれまで起こったあらゆることの名残と、彼にこれから起こるあらゆることの兆し、そして宇宙に生じるあらゆることの形跡さえも存在すると言うことが出来る。しかしそれらすべてを認識することは神だけに許されているのである」⁽⁴⁹⁾。

個体概念はそれにまつわるあらゆる述語を含む完成された概念である。つまり「各人の個体概念は将来のすべてにわたってその人に起こることのすべてを既に含んでいる」⁽⁵⁰⁾。したがって、個体概念は無限の述語を内包する。ライプニッツは言う。「個体的実体の概念はそれに関わるあらゆる出来事とあらゆる規定を含み、さらに俗に外的と呼ばれる（つまり事物と事物の一般的つながりと実体が独自の仕方ですべての宇宙を表出することによって初めてその実体に属することになる）規定をも含んでいる」⁽⁵¹⁾と。ここでライプニッツは個体概念の特質として、それが「外的規定 (dénomination extrinseque)」をも含むことを指摘している。「外的規定」とは、その規定がなくとも個体概念がその本質を失わないような規定である。それとは反対に、「内的規定 (dénomination intrinseque)」とは、その規定がなければ個体概念がその本質を失ってしまうような規定である。しかし今の引用でライプニッツが「俗に外的と呼ばれる規定」という言い方をしていることから分かるように、外的規定のような規定をライプニッツは認めない。ライプニッツにとっては俗に外的と呼ばれているような規定も、それがなければ個体概念はその本質を失ってしまうような規定であり、いわゆる外的規定と呼ばれている規定も内的規定としての意味を持

つ⁽²²⁾。

ところで、この内的規定と外的規定は先に見た必然的真理と偶然的真理に関係がある。つまり内的規定は必然的真理に、外的規定は偶然的真理にそれぞれ対応する。必然的真理とはその反対が矛盾を生じるような真理であるが、内的規定は個体概念にとって正にそういったものである。ここに内的規定が必然的真理としての意味を持つことが分かる。また、偶然的真理とはその反対のものを考えることも可能であるような真理であるが、これは正に、いわゆる外的規定が個体概念の本質を左右しないことに対応している。そして偶然的真理において偶然的な事柄、つまりその反対を想定することも可能であるような事柄が主語概念に内属するように、外的規定も究極的な主語としての個体概念に含まれる。したがって、究極的な主語概念としての個体概念が、必然的真理のみならず偶然的真理をも含むのに対応して、それは内的規定のみならず外的規定をも含む。それは個体概念が宇宙全体と、あるいはあらゆる事物と関係を持つ概念であることを意味している。時代は下るが、『人間知性新論 (*Nouveaux essais sur l'entendement humain*)』(1703年完成)においても彼は次のように言っている。「もっとも、形而上学的な厳密さにおいては、あらゆる事物の實在的な結合のゆえに、完全に外的な規定(純粹ニ外的ナ規定)は全く存在しないというのが本当のところなのである」⁽²³⁾と。このことはまた同時に、個体概念が全宇宙を表出(*exprimer*)していることを意味する。全宇宙の表出とは、個体的実体が宇宙のあらゆる事物と関係を持つことの裏の表現である。それゆえライプニッツは先に引用したアルノーへの書簡の中で、「いかなる個体的実体も、それぞれの仕方、そしてある関係の下で、あるいは、いわばその個体的実体が宇宙を眺める視点に従って、全宇宙を丸々表出する」⁽²⁴⁾と言うのである。したがって、「どんな人ないし実体も大世界を表出する一つの小さな世界のようなもの」⁽²⁵⁾ということになる。ライプニッツにおいて人間は世界の縮図である。人間の存在は世界全体との関係性の中でこそ初めて成立する。むしろ人間の存在は世界の事物の結び付きそのものとも言える。このことは他者論(延いては教育関係論)に興味深い視座を与えてくれる。というのも、そこでは一人の人間存在は他者との関係性(結び付きのあり方)として考えられているからである。

V. 実体相互間一致の基礎指定(予定調和の基礎指定)

ライプニッツにおいて個体としての人間が他との関係性の中で成立する「一」なるものであるとして、それではその関係性とはいかなるものであるのか。次に我々は関係性そのものを問題にしなければならない。それは実体と実体の関係を問うことであり、諸実体が織りなす世界のありかたを問うことである。

ライプニッツにおける個体的実体は、他者との関係性の中で成立する一つの結び目のようなものであり、それは他(多)をまとめあげる一なるものである。個体的実体は後には「モナド(Monade)」と呼ばれるようになるが、モナドという言葉はギリシャ語の“μονάς”に由来し、それは「一」を意味する。

1686年の頃、多様な述語概念を「一」にまとめるものとして実体は、それが個体概念を表すところから、個体的実体と呼ばれた。個体〔英〕individual〔独〕Individuum〔仏〕individu) というのは、ギリシャ語の“ἄτομον”に由来し、そのラテン語訳の“individuum”から来た言葉で、

元来、「分割できぬもの」を意味し、それは単一なるものであり、独立性と統一性を持つ。したがってライプニッツにとって個体的実体は、分割できぬ一なるもの、部分のない一なるもの、独立的なる一なるものを意味する。ここにおいてライプニッツは、「各々の個体的実体すなわち完全な存在 (*estre complet*) は、神以外の他のすべてのものから独立した別々の一つの世界のようなものである」⁽²⁶⁾と言う。この言葉が意味しているのは次の二つのことである。まず第一にそれは、個体的実体が大世界を表出しているために、それが小さな世界のようなものになっているということであり、第二には個体的実体が「完全な存在」であるために他のものから全く独立しているということである。第二の点に関して、ライプニッツは『モノドロギー (*Monadologie*)』(1714年完成)の中で、「モノドには窓がない (*Les Monades n'ont point de fenêtres*)」という言い方を⁽²⁷⁾する。ここで「窓がない」とは、実体が他の実体と直接作用し合うことがないという意味である。

個体的実体(モノド)は完全な存在であり、他と一切交渉を持たない独立で自存な存在であるが、これら実体同士は互いに対応し一致し合う。この関係をライプニッツは「予定調和の基礎措定 (*l'hypothèse de l'harmonie préétablie*)」と呼ぶ。我々は繰り返し実体が全宇宙を表出することを見てきたが、ライプニッツは「あるものが他のものを表出するというのは、一方について言い得ることと他方について言い得ることの間に恒常的で規則的な関係が存しているということである」⁽²⁸⁾と言う。実体が全宇宙を表出することは、実体と実体の間に対応が生じているということである。先の1686年7月14日付アルノー宛書簡では、ライプニッツはこの実体間の対応連関性⁽²⁹⁾を「同時生起の基礎措定すなわち実体相互間一致の基礎措定 (*l'Hypothèse de la concomitance ou l'accord des substances entre elles*)」と呼んでいる⁽³⁰⁾。予定調和の基礎措定(実体相互間一致の基礎措定)が生じるのは、「実体がすべて同じ一つの宇宙の表現であるからである」⁽³¹⁾。実体は互いに交渉を持たない独立な存在であるが、それらは一つの同じ宇宙を表出し合うことで互いに一致する。そしてこの一致がまた一つの宇宙を指し示すことになる。つまり宇宙を表出し合う実体相互間の一致が、一つの宇宙の存在を保証してもいるのである。

先の議論で実体を内属説から導き出したが、実はそこで導き出される実体は論理的に可能であるに過ぎない。実体の実在が真に保証されるためには、それが単に「可能的なもの (*possibilia*)」であるだけでなく、「共可能的なもの (*compossibilia*)」でなければならない⁽³²⁾。ここで共可能とは可能性を共有し合っているという意味である。実体はその可能性を共有し合うことで自らの実在の保証を得る。つまり実体は対応連関し合う関係性の中で自らの実在性を獲得するのである。そしてその実体相互の関係性が一つの宇宙を紡ぎ出す。実体相互の関係性は自らの存在を成立させつつ、一つの宇宙の存在を成立させるのである。

VI. ライプニッツにおける人間の実在性

個体的実体は支え支え合うことによってその実在性を獲得する。ライプニッツは他と対応連関するものこそが真に存在するものと考えた。この対応連関性は可能性を共有し合うこと、すなわち共可能性を意味する。個体的実体同士は互いにその存在を保証し合うことで自らの存在を成立させ、そしてその関係性の全体が一つの宇宙を成立させる。網の目のように張り巡らされた個体

的実体相互の対応連関性が全体として個体的実体そのものおよび一つの宇宙の実在性を保証している。個体的実体は宇宙の集中したものであり、宇宙を表出するものである。個体的実体を導く内属説は「一」の論理であり、宇宙（個体的実体相互の対応連関性の全体）を成り立たせる予定調和の基礎措定は「多」の論理である。この一の論理と多の論理の重なり合うところに「存在」は浮かび上がる。ライプニッツにおいて人間は、一の論理と多の論理の重なり合うところに成立する。

個体としての人間は、他（多）との関係性の中で自らの存在を成立させる一なるものである。人間は一つの個、一つの完全な存在として独立しつつも他の一切と関係を持つ。人間は他者あるいは宇宙の全体と可能性を共有するのでなければ真に存在するものとはならない。人間は他（多）との関係性の中ではじめて成立する一なるものである。ライプニッツにおける人間とは他者との関係性の中で成立する一つの結び目のようなものである。そこでは、先に人間存在という点があり、そこから点と点の関係性が考えられていくのではない。むしろ逆に関係性が人間存在を規定する。人間とは一つの関係性である。したがってライプニッツにおいて人間存在論は本質的に自他関係論ということになる。

結 び

一人の人間とは単なる可能性に過ぎない。人間が可能性を共有し合うためには他者と向き合い他者と対話することが必要となる。そこにおいて可能性は単なる可能性から共可能性へと至るであろう。教育関係はある意味で他者との対話である。ライプニッツの論に依拠すれば、教育的行為とは人間同士の可能性を共有させ人間を真の存在へと導く行為であるということになろう。教育とは人間の可能性を共可能性へと導く行為なのである。

ライプニッツにおいては他者との関係性こそが人間存在を規定するのであるから、ライプニッツにおける人間とはいわば教育（学）的人間である。ライプニッツは人間存在に教育的関係を結び付けるのではなく、人間存在そのものを教育的関係のうちに読み解く。それは人間存在の本質を自他の対話的關係に見るということである。この論の立て方には、従来、教育学のアポリアとされて来た教育者と被教育者の対立を解消していくヒントが隠されている。というのもそこでは教育者と被教育者は互いに対応・一致することで一つの同じ宇宙を成立せしめる相互連関的な対話者となるからである。これらの対話者は関係性のうちに自らの存在を得る。彼ら是对話し共に歩むことで自らの存在を確保しようとする。つまり彼らの対話は対立ではなく共可能性へ向けての共働なのである。そこではまず人間があり、そして関係を形成するのではない。そうではなく逆に他者との関係性の中に人間の存在が規定されるのである。しかしだからといって人間の個としての独立性が否定されるのではない。ライプニッツにおいて人間はあくまでも個として完全な存在である。しかしその個は宇宙の中で孤立的なものでは決してなく、他者との対話的關係の中で自らを共可能的に成立させる教育（学）的存在である。人間同士は一致し、一つの宇宙を形成する。宇宙全体で可能性を共有するものこそ存在と言い得るのだから。

〔註〕

- (1) 市村尚久・天野正治・増渕幸男編『教育関係の再構築』東信堂，1996年，iv頁。
- (2) *Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz*, herausgegeben von C.I.Gerhardt, Nachdr.Heildesheim, 1978, IV, S.363. (以下，本著作集をG.と略記。ローマ数字で巻数を指示。)
- (3) Michel Serres, *Le système de Leibniz et ses modèles mathématiques*, Paris: P.U.F., 2^{ed.}, 1968, pp.7-8.
- (4) 増永洋三『ライプニッツ』講談社，1989年，6-7頁；永井博『ライプニッツ』勁草書房，1985年，198頁。
- (5) cf.Eduard Dillmann, *Eine neue Darstellung der Leibnizschen Monadenlehre*, Leipzig, 1891; Ernst Cassirer, *Leibniz' System in seinen wissenschaftlichen Grundlagen*, Marburg, 1902; Albert Görland, *Der Gottesbegriff bei Leibniz*, Giessen, 1907; Heinz Heimsoeth, *Die Methode der Erkenntnis bei Descartes und Leibniz*, Giessen, 1912-1914; Bertrand Russell, *A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz*, Cambridge, 1900; Louis Couturat, *La logique de Leibniz d'après des documents inédits*, Paris, 1901; Léon Brunschvicg, *Spinoza et ses contemporains*, 4^{ed.}, Paris, 1951.
- (6) G.IV, S.434 (=Discours de métaphysique, § 9). «comme une même ville est diversement représentée selon les différentes situations de celui qui la regarde.»
- (7) G.III, S.245. «je considère effectivement la notion de la substance comme une des clefs de la véritable philosophie.» Cf.G.II, S.78, G.III, S.567. 山本信『ライプニッツ哲学研究』東京大学出版会，第四版1991年，109頁参照。17世紀において実体論は哲学の重要な位置を占めた。
- (8) ゲルハルト版『ライプニッツ著作集』の註では (G.II, S.47)，ライプニッツの草稿では1686年6月となっていることが指摘されている。
- (9) G.II, S.56. «tousjours, dans toute proposition affirmative, véritable, nécessaire ou contingente, universelle ou singulière, la notion du predicat est comprise en quelque façon dans celle du sujet, praedicatum inest subjecto; ou bien je ne scay ce que c'est que la vérité.»
- (10) *Opusculs et fragments inédits de Leibniz*, édités par Lous Couturat, Paris, 1903, Nachdr.Hildesheim・Zürich・New York: Olms, 1988, p.377 (=Generales Inquisitiones de Analyti Notionum et Veritatum, § 75). «Si, ut spero, possim concipere omnes propositiones instar terminorum, et Hypotheticas instar Categoricarum, et universaliter tractare omnes, miram ea res in mea characteristicam et analysi notionum promittit facilitatem, eritque inventum maximi momenti.»
- (11) *Opusculs et fragments inédits*, p.49 (=Elementa Calculi, § 2) .
- (12) G.II, S.56.
- (13) 『ライプニッツ著作集8』工作舎，1990年，273頁，および酒井潔『世界と自我』創文社，1987年，307頁。なお，本稿は（とりわけライプニッツの論理学的主張に関して）同書の研究に負うところが多い。
- (14) G.IV, SS.437-439 (=Discours de métaphysique, § 13). cf.G.VI, S.107, G.VII, SS.302-303.
- (15) G.IV, S.432 (=Discours de métaphysique, § 8).
- (16) G.II, S.457.
- (17) G.IV, S.433 (=Discours de métaphysique, § 8). «la nature d'une substance individuelle ou d'un estre complet, est d'avoir une notion si accomplie qu'elle soit suffisante à comprendre et à en faire deduire tous les predicats du sujet à qui cette notion est attribuée.»
- (18) G.IV, S.433 (=Discours de métaphysique, § 8). «un estre dont la notion n'enferme point tout ce qu'on peut attribuer au sujet à qui on attribue cette notion.»
- (19) G.IV, S.433 (=Discours de métaphysique, § 8).
- (20) G.II, S.48.
- (21) G.II, S.56. «la notion de la substance individuelle enferme tous ses evenemens et toutes ses denominations, même celles qu'on appelle vulgairement extrinseques (c'est à dire qui ne luy appartiennent qu'en vertu de la connexion generale des choses et de ce qu'elle exprime tout l'univers à sa maniere)»

- (22) 『ライプニッツ著作集8』 工作舎, 1990年, 272-273頁参照。
- (23) G.V, S.211 (=Nouveaux essais sur l'entendement humain, Livre II, Chapitre XXV, § 5). 《quoyque dans la rigueur metaphysique il soit vray, qu'il n'y a point de denomination entierement exterieure (denominatio pure extrinseca) à cause de la connexion reelle de toutes choses.》
- (24) G.II, S.57.
- (25) G.IV, S.441 (=Discours de métaphysique, § 16).
- (26) G.II, S.57.
- (27) 詳しくは, 「モナドにはそこを通過して何かが出入りするような窓はない (Les Monades n'ont point de fenêtres, par lesquelles quelque chose y puisse entrer ou sortir.)」。G.VI, S.607 (=Monadologie, § 7).
- (28) G.II, S.112.
- (29) 「対応連関性」については池田善昭『『モナドロロジー』を読む』(世界思想社, 1994年)より多くの示唆を得ている。
- (30) G.II, S.58.
- (31) G.VI, S.620 (=Monadologie, § 78). 《puisqu'elles sont toutes des representations d'un même Univers.》
- (32) G.VII, S.289.

[参考・引用文献一覧]

- Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz, herausgegeben von C.I.Gerhardt, Berlin, 1875-1890, Nachdr.Heildesheim: Olms, 7Bde, 1978.
- Opusculs et fragments inédits de Leibniz, édités par Lous Couturat, Paris, 1903, Nachdr.Hildesheim・Zürich・New York: Olms, 1988.
- 『ライプニッツ著作集』全10巻, 下村寅太郎・山本信・中村幸四郎・原享吉監修, 工作舎, 1988年-1999年.
- 『世界の名著 第25巻 スピノザ ライプニッツ』責任編集・下村寅太郎, 中央公論社, 1969年.
- Burkhardt, Hans, Logik und Semiotik in der Philosophie von Leibniz, München: Philosophia-Verlag, 1980.
- Brunschvicg, Léon, Spinoza et ses contemporains, 4^eéd., Paris: P.U.F., 1951.
- Cassirer, Ernst, Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit, Zweiter Band, 3.ed., Berlin: Verlag Bruno Cassirer, 1922, Nachdr.Hildesheim・Zürich・New York: Olms, 1991.
- Cassirer, Ernst, Leibniz' System in seinen wissenschaftlichen Grundlagen, Marburg: Elwert, 1902.
- Couturat, Louis, La logique de Leibniz d'après des documents inédits, Paris, 1901, Nachdr.Hildesheim: Olms, 1961.
- Deleuze, Gilles, Le Pli: Leibniz et le baroque, Paris: Les Editions de Minuit, 1988.
- Dillmann, Eduard, Eine neue Darstellung der Leibnizschen Monadenlehre, Leipzig, 1891, Reprint, New York: Georg Olms Verlag, 1974.
- Görland, Albert, Der Gottesbegriff bei Leibniz, Giessen: A. Topelmann, 1907.
- Heimsoeth, Heinz, Die Methode der Erkenntnis bei Descartes und Leibniz, Giessen: A. Topelmann, 1912-1914.
- Ishiguro, Hidé, Leibniz's philosophy of logic and language, London: Duckworth, 1972.
- Russell, Bertrand, A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz, London; Cambridge, 1900, New ed., London: Allen and Unwin, 1937.
- Serres, Michel, Le système de Leibniz et ses modèles mathématiques, Paris: P.U.F., 1^eéd.1968, 2^eéd.1982.
- E・J・エイトン (渡辺正雄・原純夫・佐柳文男訳)『ライプニッツの普遍計画』工作舎, 1990年.
[E. J. Aiton, LEIBNIZ-A Biography, Bristol and Boston: Adam Hilger Ltd., 1985.]
- 池田善昭『ライプニッツ哲学論攷』南窓社, 1983年.
- 池田善昭『『モナドロロジー』を読む』世界思想社, 1994年.
- 酒井潔『世界と自我』創文社, 1987年.
- 清水富雄『ライプニッツ』創文社, 1959年, 再版1986年.
- 『下村寅太郎著作集7 ライプニッツ研究』みすず書房, 1989年.

中井：ライプニッツの論理学的人間存在論

- 田中英三『ライプニッツ的世界の宗教哲学』創文社，1977年。
- 永井博『ライプニッツ研究』筑摩書房，1954年。
- 永井博『ライプニッツ』勁草書房，1958年，改装版再版，1985年。
- 三宅剛一『学の形成と自然的世界』弘文堂，1940年，再刊みすず書房，1973年。
- 山本信『ライプニッツ哲学研究』東京大学出版会，1953年，第四版1991年。

（日本学術振興会特別研究員 博士後期課程3回生，教育学講座）